

世界遺産はほかにもないか？

近藤 節夫

いまユネスコが承認している世界遺産は、851箇所である。日本でも14箇所が登録されている。どれをとっても見てみたい、行ってみたい魅力的なところばかりである。その人気にあやかって、TV番組放映や、書籍類がはんらんして、遂に「世界遺産人気ランキング」なる奇妙な風潮まで現れてきた。中には、ユネスコが一方的に決めるのはおかしいとばかり、「裏世界遺産」とか、「影世界遺産」と称して本末転倒な企画まで登場してきた。まるでプロレスやボクシングの興行権争いと遜色なく、本来の主旨から外れかねない。

今年7月、「新・世界七不思議財団」と称するスイスの財団が、世界中からインターネットで寄せられた1億通の投票により、古代の「世界七不思議」に代わる新しい七つの建物を、「新・世界の七不思議」として選出した。7つの建物は、すでに世界遺産にも登録されており、素晴らしい建造物ばかりだが、何をいまさらという気がしないでもない。

「世界遺産」とは、接しているだけで心に安らぎを与えてくれ、想像力を掻きたて夢を与えてくれるものであると思う。そうだとすると、現在文化遺産、自然遺産、複合遺産と分けられている世界遺産以外にも、まだ目を凝らせば素晴らしい文化遺産があるのではないか。実際、人類共通の遺産という以上、文化遺産の中に、形はなくても心を癒してくれる芸術「無形文化遺産」なんかも検討してみてはどうだろうか。音楽やお祭り、民族舞踏なども採用する資格と価値があると考えている。

例えば、その場所ならではのステージと曲の雰囲気を取り合わせが絶妙で、最高のパフォーマンスとなるギザのピラミッド傍やヴェローナのアリーナで上演されるオペラ「アイーダ」、その他リオのカーニヴァル、祇園祭り、バリ島のケチャック・ダンス等々も世界的な人類共通の文化遺産として、永劫に守り続けていくべきではないかと思っている。